
スリーヤミーゴス

夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スリーヤミーゴス

【Nコード】

N6886Y

【作者名】

夜

【あらすじ】

ミステリー愛好会と掲げられた扉の向こう、彼らは存在する。

犯罪研究同好会（通称：犯研）、あるいは《スリーヤミーゴス》と呼ばれる三人組。犯罪マニアの美少女御来屋クロエ、イケメンバンドマン龍崎大翔、イケメンモデル宝生捺樹。

時に事件解決に協力し、報奨で活動続ける彼らの実態は仲良しトリオでもなく……

サイト『Dis Pater』でも掲載中です。

犯研 01

さらりと落ち、影を落とす艶やかで癖のない黒髪を少女は煩わしげに細くたおやかな指でさつと形の良い耳にかける。墨を流したように腰まで届く漆黒は一度も染めたことがないようで、処女雪の如き肌によく映える。

長い睫に縁取られた瞳は一点に注がれ、ぷっくりとした上品な薔薇色の唇は時折呟くように小さく動き、一瞬だけ髪に触れた指はその先で忙しく動いている。

黒い革張りのソファに座るその膝の上にはライセンスストーンでデコレーションされたピンクのノートパソコンが置かれ、彼女は先程からずっと打ち込んでいるのだ。

人それぞれ好みの違いはあれど、英明学園えいめいを代表する美女に数えられる一人である。二年F組、御来屋クロエみくりや 華奢で清楚な印象ながら《犯罪マニア》という不名誉な称号を冠された美少女の姿である。

「先生はどう思いますか？ 今回の事件」

コミックに目を落としてつつ、時折クロエを盗み見ていた三笠颯太みかさそうたは意を決して切り出してみた。ずっと気になっていたのだが、タイミングを考えていたのだ。

今は放課後、彼女も颯太も部活動に励んでいるということになるのだが、青春という空気は一切ない。熱く心を一つにして目指すものがあるわけでもなく、甘酸っぱい体験もまず考えられない。そもそも部室らしくもない。

「先生はやめてって言うてるでしょ。ただの先輩なんだから」

視線も指もそのままにクロエは不満を漏らした。

彼女はいつもそうだ。颯太さえ気にしなければ好きに話しかけていいことになっている。ただし、先生と呼ばれることだけは拒否す

る。颯太は一年、たった一年先輩だけで、いくら小説を書いているからと言って、そう呼ばれることがクロエ気に入らないようだ。

「俺にとっては神にも近いですから。だから、先生です」

思ったままのことを口にすれば彼女は小さく溜息を吐いて手を止めた。

「神って言うなら、あの男がそうでしょ？ あなたにとっては」

吊り目がちなアーモンド型の目が颯太を通り越す。自分にとってはそうではないと、最後の言葉を強調することで示しているようだった。

颯太がつられて振り向けば、いかにも高級そうな黒いアームチェアに体を沈めた男が目に入る。尤も、彼は颯太の真後ろにいたために体をかなり捻らなければならなかった。

彼もまたクロエと同じ二年生で、クラスメートという関係にあるはずなのだが、友好的な空気は一切ない。

そして、颯太と同じ制服に身を包んでいるのだが、別物のようにも思えてしまう。存在感がまるで違うのだ。

髪こそ黒々とした短髪だが、百八十を超える身長を持ち主で、座っていても圧倒されるものがあり、全体的に派手な印象だ。

襟を大きく開けたシャツから覗く胸板は逞しく、よく鍛えられているのがわかり、大振りなデザインのシルバーネックレスが下げられている。男らしい太く長い指には枷のようにゴツゴツした指輪がはめられ、無造作にファイルのページをめくっていた。

彼は完全に自分の世界に入っている様子でクロエと颯太の会話など気にも止めていない。いつものことだ。

颯太はクロエに向き直る。

「確かにあの人は天才です」

聞き耳など立てているはずもないのに、自分達にまるで興味がな
いことはわかつていのに、颯太は自然と小声になってしまう。颯太の中の彼に対する苦手意識がそうさせているのかもしれない。こ
こでの彼は取っ付きにくいとしか言いようがない。

龍崎大翔、または人気バンド《ドラグーン》のリユウ、颯太にと

っては後者の方が馴染みがある。

熱狂的なファンが多い中で颯太は自分はそのままでではないと思っていたが、ひよっとしたら図々しい部類なのかもしれない。こうして憧れの大翔と同じ室内にいて、学園一とも言える美少女と話をしているのだから、何も知らない他人から見れば実に幸せ者だ。大翔に対する幻想など今は薄れつつあるのだが。

「脳の使い方を間違えた、ね」

彼が天才であることはクロエにも否定することはできないのだが、どうしても余計なことを付け足したいらしかった。

「それをあなたが言うんですか」

颯太が呆れ混じりに吐き出せ、クロエはそっと目を伏せる。

「私は凡才だから」

颯太は全力で否定したいのを必死に堪えた。

彼女が凡才であるはずもない。もし、そうであるなら自分は何になっってしまうのだろうか。たとえば、その問いをぶつけたとしても彼女は答えをくれないだろう。彼女は天使でも女神でもない。

「俺にとっては二人とも天才ですよ」

毎日アームチェアに悠々と座ってファイルを見ているだけの大翔を天才と称するならばクロエのことと同列で扱われなければならないと颯太は常々思っている。

否、ここには忘れてはならない人間がもう一人いた。

「……三人ですね」

今この場にはいないが、彼も間違いなく天才だというのは颯太如きが覆すことのできない事実だった。

言い換えるならば、この部屋に入ることの許された四人の内、颯太だけが取り立てて何もない凡才なのである。

「二人と私と一緒にしないで」

クロエの口から発せられたのは珍しく強い言葉だった。睨まれると美人なだけに迫力があり、気の弱い颯太は萎縮してしまう。

「すみません……」

颯太も懲りないのだが、彼女はとにかく二人と同列にされることを嫌がる。彼女は自身を颯太と同列と考えているのだが、それは間違いとしか言いようがなかった。

颯太が彼女と同列として振る舞った日にはもう三人目の天才から言葉にはできないような仕打ちを受けることだろう。暫く口がきけなくなるかもしれない。考えるだけで体に震えが走るほどだ。

「二人は本物の天才だけど、私は違う。劇的な推理も何もできない助手ですらない」

クロエにコンプレックスがあるとすれば、それなのかもしれない。

彼女ほどの才色兼備な人間が何を悩むのか、颯太には微塵もわからないが、そもそも理解が可能な領域ではない。同じ空間にいると違いをひしひしと感じてしまう。

つまり、彼女は自分というものをまるでわかっていないのだ。常に過小な評価をし、大抵の場合颯太にとっては迷惑であることが多い。

パタンという音がして、反射的に振り返れば大翔がファイルを閉じたところだった。脇腹がピキリとつり、思わず呻いたが、誰も心配はしてくれない。

「安心しろ、御来屋。てめえは間違いなく天才的な変態だ。称賛に値するほどのな」

大翔の意志の強さの象徴でもある黒曜石のような瞳がやはり颯太を無視して真っ直ぐにクロエに向けられている。一体、どこから聞こえていたのだろうか。

『それはあなたのことでしょ？』

クロエは反論しなかったが、颯太にはそんな声が聞こえた気がした。

彼女はいつだって何かを言いたげにしているが、絶対に口にはし

ない。力関係というものがあり、クロエは自分が下だと思っている。実際、成り立ちを思えば二人は対等とは言えないのかもしれないが、颯太には不思議でならなかった。

「ちなみにこれは俺なりの褒め言葉だ」

勘違いするな、と大翔が付け加えるが、意味のないことだ。どんな言葉を使っても二人の関係は覆らない。いつでもクロエは大翔に対して少し怯えている。まるで颯太が憧れていたはずの大翔に苦手意識を持つように。

「それで、せ……御来屋先輩の見解はどうなんですか？ 龍崎先輩も聞かせてくれるとありがたいんですけど……」

気を取り直して颯太はもう一度聞いてみる。目の前のテーブルの上に乱雑に置かれた新聞や週刊誌の中から一番上にあった適当な物を広げて、指さす。

残りにも同じ事件に関する記事が並んでいる。最近、巷を騒がせる《妊婦連続殺人事件》だ。

「俺からは興味が沸かねえ事件としか言えねえが……」

そこまで言いかけて大翔は視線を動かした。それを追って颯太は早まったことをしたと近頃暴走気味な己の好奇心を呪った。

今度は反対側に捻られた脇腹がつかると同時に心臓まで引き攣ってしまったような気がした。

「何、勝手に、この俺を差し置いて始めようとしてんの？ おちびちゃん。お前はいつから、そんなに偉くなったのかな？ ん？」

入り口に立っているのは長身痩躯の男、端正な顔に不機嫌を露わにして颯太を睨みながら純白のトレンチコートをハンガーに掛ける。大翔とはまた違う派手さがある男子生徒だ。

アッシュブラウンに染めた髪は今日も隙なく綺麗にセットされ、クロエほどではないにしても白い肌は手入れが行き届いているようで、ニキビなど彼には無縁の話なのかもしれない。日焼けをしたことがあるのかも怪しいほどだ。

肌だけではなく、髪も指先も、きつと足の先に至るまで、全てにおいて気を抜いていないだろう。隙間から覗く耳にはピアス、開けた胸元ではネックレスを煌めかせ、自然な仕草で前髪を掻き上げる指もリングに彩られている。

大翔をワイルドと表現するなら彼はスタイリッシュである。アクセサリーの趣味も大振りな物を好む大翔に対して捺樹は繊細なものを身に着けている。

彼らはこの学園で最も有名なイケメンだ。大翔に《ドラグーン》のフロントマンという肩書きがあるように、もう一人 ほうしょうなつき 宝生捺樹は学生モデルだ。

つまり、学校一の天才美男美女が三人も一つの部屋に集まっているのだから、容姿も成績も何から何まで凡人である颯太には肩身の狭いものであり、羨ましがられても、実際は喜んで代わってほしいほどに息苦しい。

三人が揃っていることも、そこに颯太がいることも大いなる謎であり、英明学園の新七不思議にも含まれているほどだ。否、新七不思議のほとんどが犯研絡みだと言っても過言ではない。

「す、すいません！ 今日には来ないと思って……」

颯太は焦った。捺樹は怒らせると大変であり、特に紅茶の用意を始めた今はまずい。熱湯をかけられたことがあるわけではないのだが、彼ならばやりかねない空気がある。

クロエ同様、綺麗だからこそ冷たく、迫力があるものだ。彼女はまだいいが、捺樹は元々気分屋であり、理不尽なところが多々ある。特に颯太には一切の容赦をせず、それどころか『社会の厳しさを今から教えてあげて』と言い張るのだ。彼もまた一つ年上なだけなのだが。

颯太は捺樹から名前を呼ばれたことはない。出会った時から『おちびちゃん』だ。百八十センチ近い彼からすればギリギリ百六十センチの颯太などちびで十分なのかもしれないが、名前を呼ばれないということは認められていないということのようだ。

単なる後輩いじめなのだが、どうにかできるわけでもない。

「クロエ、お菓子食べよっか？ 今日ね、すっごく美味しいって評判のチョコを取り寄せたの」

捺樹は当然のようにクロエのすぐ隣に座った。大きめの二人掛けのソファは痩せた二人が座っても余裕があるにも関わらずぴたりとくっついていて。その手には小さな箱が乗り、綺麗なチョコレートが収まっていた。

「うわっ、それ、超有名店のじゃないですか！ 俺でも聞いたことありますよ！」

一粒五百円もするような代物だ。テレビでも話題で入手が難しいというそれを彼はきつと軽々と手に入れるのだろっ。冷静であれば、憧れるほど何もかもがスマートな男なのだ。

「お前にはこれで十分だよ」

「いたっ！」

余程颯太が物欲しそうに見えたのか捺樹はテーブルの上の籠に入った個別包装のチョコレートを投げ付けてくる。お徳用パックに入った安売りのチョコレートだが、颯太はこれが好きだった。

「ありがとうございます！」

捺樹はただ理不尽ではなく、きちんと優しさも持ち合わせている。だから、女性にとってもモテる。なぜか男性ファンの方が多い、大翔とは何から何までが対照的だ。

その優しさのほとんどはクロエに注がれてしまい、その他の人間に向けられるのはほんの一片だというのが残念な部分である。

しかし、二人は恋人同士というわけではない。捺樹はすっかりその気のようなが、クロエは嫌がっている。それでも、彼の機嫌を損ねると面倒だということをよくわかっていいるからこそ、ある程度は容認しているところがあり、大翔もわざわざ何かを言うのは面倒だと思っているようだ。

「宝生、てめえが答えてやったらどうだ？ そっちの管轄だろ」

シューツという音に颯太が振り返れば、大翔がエスプレッソマシンでコーヒーを淹れたところだった。

捺樹がカップに注ぎ始めた紅茶は彼とクロエの二人分、どちらも颯太の分は用意してくれない。それについては既に諦めがついている。それにコーヒーも紅茶もあまり好きではない。

「クロエは聞きたい？ 俺の口から、この事件のこと」

彼のような本物の王子様系イケメンに耳元で甘い声で囁かれ、自然に髪を撫でられれば頷かずにはいられないものだと思いが、クロエは例外だった。捺樹の手がびたりと止まった。

その喉元には深紅の万年筆が突き付けられ、捺樹が「わお」と声を上げる。いい加減にして、という意味が込められているようだ。彼女は何もかもを許しているわけではない。度を超えれば、警告する。

「何も言わないなら、あなたがここに来る意味はない。そうでしょう？ 勿体ぶるなら、あなたなんて価値のない邪魔なだけの飾り物よ」
クロエは淡々と辛辣なことを言うのだが、そこまで言われても捺樹はニツコリと笑む。老若男女問わず虜にしてきた極上品だ。

「君のためだよ、クロエ。君だけのために俺は価値を持つ」

颯太はいつも不思議だった。自分が女だったならば、こんな笑みを見せられ、特別視した言葉を滑らかに口にされ続ければすぐに堕ちてしまうと思う。それなのに、クロエはいつも嫌そうな反応こそ見せるものの、決して頬を染めたりすることはない。今も冷ややかな目で捺樹を見ている。

その点では彼女は確かに特別な存在なのかもしれない。そこに悪い意味を含めれば、普通ではないとも言える。三人とも、颯太から見れば普通の部分など持ち合わせていないくらいなのだが、特にクロエは敬遠されるようなタイプだった。

「美少女が失踪ってよくあるけど、美少年とかイケメンって聞いたことない気がする」

「そう言えば……美人OLとかもよく聞きますけど……」
ぼつりと口にしたクロエに颯太も同意するように呟く。

失踪者など颯太にとっても他人事だ。現実のようにも思えず、報道される少女に対して美人でも何でもないという失礼極まりない感想を持ってしまふ。人々の興味を引き付けて情報を集めようというものなのだろうが、クロエのような本物の美少女を知ってしまったからは好きだったアイドルの顔さえ崩れて見えてしまうようになった。

彼女は家庭のことは一切話さず、異国の響きを感じる名前も今時珍しくはないものの、純日本人ではないからかもしれないと颯太は日々勘ぐっている。彼女の所作は丁寧で美しく、お嬢様であることは間違いないと睨んでいる。

「行方不明者の男女比は、男の方が多いいんだ。自殺者もそうだが、女は性犯罪が絡んだりするから……男なら、ただの家出ってことになるんじゃない？ 旅に出たがったりするもんだろ」

そう分析するのは再びアームチェアに体を預けた大翔だ。あまり彼らの話題に加わりたがらず、いつもはずっと自分の世界に入り込んでいるのだが、統計的なことは彼の分野なのかもしれない。

彼らは仲間であって仲間ではないのだ。本当に、ただ同じ所にいるだけなのだと颯太はこういう時に思い知らされる。そして、自分は会話に加わっているようで、精神的に蚊帳の外なのだと。

「捺、試しに失踪してみてくれる？」

クロエが隣の捺樹を見上げた。自然に上目遣いになり、仮面のように普段から無表情が貼り付いた顔に笑みを浮かべ、妙に可愛らしい声を出す。恋人へのおねだりにも見えるが、内容は物騒である。

つまり、これは怒りの小爆発だ。よほど捺樹が鬱陶しかったのだろう。使い所を間違えているような気もするのだが、颯太が口を挟む余地はない。

「嬉しいなあ、俺をそう認識してくれてるってことでしょ？」

勢いに任せて捺樹はクロエの肩を抱くが、その手の甲にブスリと万年筆が突き立てられた。

うつ、と小さく捺樹が呻くものの、芝居がかって見えたのは気のせいではないだろう。ペン先が出ているわけでもなく、クロエも非情になりきれないのだから元々の非力に加えて加減はなされているはずで、それほどのダメージがあるはずもないのだ。彼の何もかもが作り物ように思える。

「でも、俺はただのイケメンじゃない。人気モデル失踪って報道されるんじゃないかな？ 普通にね。そこの冴えない男どもとは格が違うよ」

失念していたと言うようにクロエが舌打ちする。

自分で言うのも凄いと颯太は思うが、実際、彼は人気だ。颯太のクラスにも彼のファンは多い。捺樹を知らない女子などの学園にはほとんど存在しないだろうし、隠れている者も含めてかなり大勢のファンがいることだろう。

「だから、俺じゃなくて、おちびちゃんの方が適任だと思うよ」

ふふつ、と笑って捺樹が颯太を見る。

「えっ、何で、俺ですか！？」

なぜ、急に自分に振られるのだろうと颯太は瞠目した。

「さあ、何でだろうね」

これも後輩いじめの一環なのだろうが、あんまりである。いなくなれと言われているようなものだ。彼ならば、そのつもりなのだろう。

「それで、てめえらは事件のことを話したいんじゃないのかよ」

ゴトリとカップを置いた大翔は呆れ返っている。いい加減に本題に入ってくれないとうるさくて仕方がないと言いたいのもかもしれない。

事件事件と物騒だが、これが彼らの部の不明確な活動の一端である。

外には《ミステリー愛好会》と掲げられているが、中には《犯罪研究同好会》という表札がある。通称犯研、こちらが真の名前だ。

物騒な名前だが、天才トリオにはもつと奇妙な呼び名が付けられている。《スリーヤミーゴス》 アミーゴスではなく、ヤミは闇であり病みだ。もちろん、颯太は含まれていない。四人目の部員であつても四人目の天才ではないからだ。

なぜ、颯太がそこにいるかと思えば、元々《ドラグーン》のリユウの大ファンであり、入学して真っ先に大翔に握手やサインを求めたところ、誘われたのだ。

『そんなに俺が好きなら、うちの部に入るか？』

軽音楽部と勘違いして一度は断ったものの、ミステリー好きなら入れると言われて刑事ドラマ好きとして、つい入部を決意してしまったのだが、犯研における颯太の立ち位置はあまりにも希薄なものだ。数合わせというわけでもない。

犯研は四人しかいないにも関わらず過去の実績から特別に部として公認されているのだが、同好会の方が響きがいいという理由でそうなっている。《ミステリー愛好会》はカムフラージュである。

大翔に尋ねたところで、はっきりした答えは得られなかったが、いつの間にか颯太は犯研の活動にハマっていた。ハードボイルドな刑事が来るわけでもなく、変態な探偵が二人とただの犯罪妄想好きがいるだけで、颯太のような軽いドラマ好きは浮いてしまうのだが、

活動はミステリーでも何でもない漫画を読んでいても構わなかった。

「妊婦連続殺人……俺としては、もうちょつとまともな名前を付けて欲しいところだけど　犯人、もうすぐ捕まるよ」

捺樹の細い指先が、紙面の文字を辿る。三件続いた妊婦殺人事件、大翔を除く犯研のメンバーは今この事件に注目していた。

「四人目はなし？」

ピクリとクロエが反応する。

不謹慎なことだが、犯研の目的の中に事件の早期解決を願うということはない。それが本質こそ隠しているものの、《スリーヤミーゴス》などと言われてしまう所以だろう。

尤も、そう言われるのはクロエのせいだというのが生徒間の見解だ。

ミステリー好きのイケメン二人を巻き込む犯罪マニアの美少女、それが全生徒の認識であり、家には拷問器具のコレクションがある、違法薬物を育てている、ホルマリン漬けのコレクションがあるなどという噂がまことしやかに囁かれている。

アームチェア・ディテクティブ

実際は過去の事件専門の安楽椅子探偵とその隠れ蓑にされている犯罪妄想マニア、それから勝手に居座っている探偵気取りだ。

もしかしたら、大翔は捺樹とクロエの空気をどうにかしてほしくて自分を入れてくれたのではないかと颯太は思っている。客観的に判断すれば『うざい』のだ。

「二人じゃあ物足りないよね」

捺樹は冷たくも美しい笑みを浮かべている。

これが彼の本性だ。現在の事件を推理するのが趣味の自称探偵であるが、必ずしも事件の解決を望んでいるわけでもない。つまらない事件をさつさと終わらせるために探偵をしているという言い方もできるかもしれない。

「さて、クロエの考えを聞かせて」

「真相を聞かされるとわかってるのに？　そんなの退屈だわ」

捺樹の口振りから何かを感じ取ったのか、クロエは渋る。

彼女の趣味はあくまでわからないことを好き勝手に妄想することであって、真実を言い当てることではない。真実を知りたいわけではないのだ。

「つまらない真相の後じゃあ、君は面白い推理をしてくれないだろ？ 話してくれたら、もう一個チョコをあげるよ？ 今度は違う味、こっちの方が君の好みかもね」

捺樹もクロエの物語に魅せられた一人である。颯太も聞きたくて仕方がないのだが、物で釣るというのもどうかと思う。それでも、クロエは迷っているようだった。

「そいつのを推理だって言うのは、探偵への冒瀆だと思わないのか？」

離れたところから大翔は問う。あまり干渉したくないとは言っても黙っていられなくなったのだろう。

性格が災いして探偵気取りと言われがちな捺樹と違い、大翔は歴とした安楽椅子探偵だと言えるが、彼にとって本業は学生、バンドは夢、探偵は趣味だ。探偵を本業にするつもりはないと言うが、それを望まない人間は多いだろう。

プライドがあるのかはわからない。敢えて言うならば嫌いなだけなのかもしれない。未だ解決されない事件があるということが許せないのかもしれない。それが生む更なる悲しみを憎んでいるのかもしれない。

「的外れの推理をする奴は山ほどいる。でも、クロエはそれとは違う。お前も理解を示してたんじゃなかったっけ？」

冷ややかに返す捺樹は氷でできているのではないかと思うほどだった。

四月に颯太が入って早半年、それ以前に一年の付き合いがあるはずの三人は《スリーヤミーゴス》と言われながらも想像されるような仲良しトリオではない。

特に会長である大翔はどちらとも仲が良くない。犯研を纏めよう

という気がまるでないのだ。颯太のことも単に後輩だとは思っていないだろう。ファンを大切にしないわけではないが、バンドの時間とそうでない時をはっきりと切り替える男だ。

「それに、俺はお前のように探偵を気取ったりはしないよ、安楽椅子探偵さん？」

答えない大翔に対して捺樹はクスツと笑って追い打ちをかける。

この二人の仲が悪いのは颯太も仕方のないことだと思う。

迷宮入りした事件の資料を手に入れ、お気に入りのアームチェアに座ったまま謎を解いてしまう大翔とゲーム感覚で現在起きている事件に首を突っ込む捺樹ではタイプが真逆だ。どちらも趣味とは言え、大きな隔たりがある。逆のことはできないからだ。それ故に興味を持たない。

そして、クロエはそのどちらとも違う。彼女は事件ならば基本的に何でもいいのだが、謎が解かれた時には興味を失ってしまう。事件を元に妄想するのが趣味なのだ。キーボードを忙しく打っていたのも、そういうことだ。しまいには架空の事件さえ作り上げてしまう。

だから、一方的すぎる愛情を抱く捺樹の気持ちも、自分で引き入れておきながら敬遠してしまう大翔の気持ちも颯太にはほんの少し理解できる気がする。彼女はどうしてもなく人を引きつけるかわれるかのどちらか、そういう種の人間だ。

颯太は捺樹側に寄っている。クロエの小説のファンである。彼女は自分が楽しむために書いているのであって他人に読ませるものではないと言うが、日頃の特異な推察に惚れ込んだ颯太は無理を言って読ませてもらっているのである。颯太が犯研にハマってしまった理由はそこにある。

このままでは一向に本題に入りそうもない。颯太自身お預けに状態に限界が来ていた。

「お、俺からもお願いします！ 御来屋先輩！」

クロエの的外れな、否、元よりの射る気のない考察を純粹に物語として聞いてみたかった。

「一度に二人殺せるから殺した。犯人はとにかく多く殺したい。妊婦なら一石二鳥」

ノートパソコンを閉じて、クロエは口を開いた。

玲瓏な声が静かに響き渡る。残酷なことをその美しい声で淡々と言うから颯太はこの語りが好きなのだ。

嫌悪がなかったと言えは嘘になるが、それは最初だけのことで、感覚はあつと言う間に麻痺してしまった。今では彼女のことを、ノンフィクションをフィクションに変える魔術師だと思っているほどだ。

事実は小説よりも奇なりとは言うが、颯太にとっては彼女の小説の方が面白く思えた。

「でも、生温い。もっと妊婦殺しをアピールするようにした方がいい。衝動的すぎる」

「確かに、妊婦を三連続で殺している割に手口は同一。ナイフで三回。それもかなり荒っぽい」

二件目が起きた時、連続したものだとは明らかにするのには時間はかからなかった。妊婦ということ差し引いても凶器は同じ、適当に三回刺している。彼らはそれが気に食わないのだ。

「腹に硫酸をかけるとか胎児を取り出して代わりの詰め物して縫合してみるとか」

それではもうただの殺人ではない。メッセージ性のある極めて猟奇的なものになるだろう。現実的ではない。

しかし、そこで彼女の妄想に浸りきれず、一割の理性が残ってしまうのが颯太である。

肝心なところで引き戻されてしまう。小説ならばフィクションだと頭が割り切ってくれるのだが、今は現実のことである。新聞などを目にしてしまえば嫌でも思い知る。

あるいは、グロというものに耐性がないのかもしれない。

犯研にハマっているのは嘘ではない。けれど、それは抜け出せなくなってしまうただけなのかもしれない。

「そ、それでも女性ですか！？ 妊婦の敵です！」

同じ女でありながらよくもそこまで言えるものだ。彼女にとって事件はリアルであってアンリアルだとわかつているのに、颯太はまだ彼ら側の人間になりきることを、どこかでは拒んでいるのかもしれない。

「妊婦、嫌い」

「はい？」

「座ることを前提に電車選んで、角取った時に目の前に立たれると寝たふりしたくなる」

《スリーヤミーゴス》の一人であることを除けば、大人しそう、

清楚、可憐、大和撫子などと言われる美少女らしからぬ台詞である。

「譲りましょうよ、若いんですから！」

「譲ってほしければ優先席に行けばいいだけ。譲るのが面倒だから絶対に優先席には座らない」

やはり彼女は社会の敵だ。颯太は思う。単に趣味で反社会的な小説を書いているだけではなく、心も体も社会に背を向けているのだ。「大体、譲ろうとしても『大丈夫です』って言われるだろ。だから優先席じゃねえならいいんじゃない？」

思わぬところからのクロエに対する同意に颯太はショックを受けた。尊敬するバンドマンである大翔でさえ、妊婦の敵なのだ。

「ほ、宝生先輩はちゃんと譲りますよね？ 女性には優しいですよ？」

彼に聞くのは正直怖いのだが、無視するとそれはそれで面倒になる。一応、問いかけておく。

「え、俺？ 善意見せて惚れられでもしたらお腹の子が可哀想でしょ？ それに、俺、妊娠したら女として見れなくなるタイプ。なんか将来子供欲しいとか思えないんだよね」

ああ、と呻いて颯太は頭を抱えた。彼に至っては敵なのか味方なのかわからない発言だった。《スリーヤミーゴス》に良心を求めるのは無駄なことだったのだ。だから、自分だけは善意の塊でいなければ、という思いがあるのかもしれない。

「龍崎、お前も意見を言ったらどうだ？」

脱線した話を捺樹が元に戻そうとする。彼は早く謎解きをしたいのではないだろう。

大翔へのライバル意識から自分の方が優れていることを思い知らせたいのだ。たとえ、大翔が自分のことを微塵も意識していないにしても常に優越感を持っていたいに違いないのだ。

「いつも言っている通り、俺は今の事件に興味はないが……」
前置きして大翔は渋々語り出す。

「大方犯人は女で、男を寝取られでもしたんじゃないか？ 怨恨だ！ 何と言ったらいいかかわらず、颯太は啞然とした。颯太でも間違いがわかるほど、あまりにいい加減な推理だった。的外れである。けれど、彼は興味がないからと適当に言っているのではなく、本当に思考が働いていないのだ。過去の事件にしか手を出さないのも、出せないと言った方が正しいだろう。それこそ解き明かされるはずの事件が迷宮に入ることになる。

「それじゃあ、点はあげられないな。ライバルとして嘆かわしい。つまらないよ、龍崎」

些か芝居がかった様子で捺樹が蔑む。既に真相を知っているという時点でフェアではないのだが、所詮遊びだ。

「憎ければ、もっとめった刺しに思うけど。それに、どれだけ寝取られてるのさ。しかも、復讐したい相手がみんな妊娠してる

って？ 妊娠ブームが起きてるとでも？」

大翔の推理の穴を捺樹は指摘するが、大翔はどうでもいいようだった。別段憤りを感じるわけでもなく、感心するわけでもない。本当に無関心、宝生捺樹のトークショーを仕方なく聞いていると言った体だ。

「それで、退屈な真相は？」

そう問うクロエは既に興味を失っているのだろうが、颯太は聞きたかった。ニュースや新聞ではなく、彼の口から聞いてこそ終わるような気がしていた。

「犯人は衝動的に一人目の女を殺した。それは犯人の中のスイッチを入れた。だから、二人目はもつと慎重に選んで殺そうと思った」殺しの快楽は甘い蜜なのだろうか。

颯太はふと考える。殺すことに恐怖を感じなければ、それはきつと人の道から外れてしまったということなのだろう。

犯研が注目するのはそういった道を踏み外した人間、中でも逸脱した者だ。

「でも、二人目を殺す前に知ってしまったんだ。彼女の腹の中にもう一つの命があったことを」

一人目の妊婦はまだ三ヶ月だった。お腹が膨らんでいるとはわからなかっただろう。

「だから、二件目も妊婦を選ばざるを得なくなった。それが間違いの素、細かいこと気にせず適当に殺せば良かったんだよ。誰でも、無差別に。別段、相手に何かをするわけでもなければ、妊婦にこだわりがあるわけでもなかったのに。計画性のなさが陳腐な事件を生み出した。お粗末すぎて俺が出るまでもなかったよ」

結局、捺樹はこの事件を追わなかった。

その方が平和だと颯太は思う。捺樹はすぐには動き出さない。一番面白い時に手を出して、つまらなくなれば見向きもしなくなる。

早い段階で自分が出るまでもなく、警察でどうにかできるものだ

と判断していたのだろう。それでも、三件起きてしまった。その結果など彼にはどうでもいいことなのだろう。

「そういうわけで、今回は何も買ってあげられないんだ」

悲しそうな表情で捺樹がクロエの首筋を一撫でする。指先に引っかけられて露わになるのは彼とペアのネックレスだ。事件を解決する度に捺樹が記念に買っては贈っているものである。

「何もいらないんだけど」

一体、ネックレスはいくつになったのかはわからない。クロエはうんざりしているようだったが、捺樹は全く気にしない様子だった。

犯研 05

「こんな事件ばつかだと鬱るよね。欲求不満でどうにかなっちゃいそう」

彼にとって事件は女性と同じなのかもしれない。

アンニユイな溜息が妙に色っぽい、すぐにその目にギラついた欲望が宿る。

「ホテルか俺の部屋か君の部屋、どれか選んでくれないかな？俺は学校でも構わないんだけどね……たとえば、あのベッドとか妖艶なオーラを全開に捺樹がクロエに迫る。クロエはノートパソコンを盾にして逃れようとしている。

犯研の部室には他にはあるはずのない物が多々あり、一つは部屋の隅にある捺樹専用ベッドである。大翔のアームチェアがあるならと休息用に運び込ませたものだ。彼らには事件を解決して得た謝礼金などもある。ある程度は学園側も容認してしまっているのだ。

三足の草鞋を履いているからということで、決していかがわしい目的ではなかったはずなのだが、今の捺樹は危険だ。

颯太は大翔の鋭い視線を感じた気がした。

「いやいや、こんな事件はやっぱり起きちゃダメですよ！」

どうにか捺樹の気分を変えなければまずいことになる。颯太は本心であるが、水を差すようなことを言った。

そんな事件でも、彼は起きてほしい側の人間だ。文句こそ言うが、何もないよりはいいということだ。

しかし、捺樹は止まらない。クロエはついに捺樹の首を絞めて抵抗を始める。

「龍崎先輩！」

校内で、それも部内で殺人は勘弁してほしい。彼女は死体を作る側であってはいけない。尤も絞め殺すほどの力が入っていないだろう。

縋るように颯太が目を向ければ、彼は無理にでも引き剥がせとばかりに手をひらつかせる。

「……確かに、殺したいだけでも、もっと美学を持った方がいい」
捺樹の首に手を伸ばしたまま、クロエがぼつりと言う。ピタリと捺樹が動きを止める。理性が戻りつつあるようだ。

「そんなの現実ではダメですって！」

「これは私の妄想の話」

絶対に本気だったと颯太は思う。

いつも彼女は妄想と現実の狭間を漂っているようだった。彼女が醸し出す儚さの正体なのかもしれない。

「お前も好き者なくせにいい子ぶるのはいい加減にしろよ、おちびちゃん」

正気を取り戻したらしい捺樹が颯太に冷たい視線を向けてくる。

否定しきれないのは事実だ。

美しい彼女が作り出す醜く残酷な物語の虜なのか、本物の事件が背景にあるとわかっていているから面白いと感じてしまうのか、わかっていない。けれど、小説は集中して読めるが、話を聞いている時には入り込み切れないことがある。それでも、聞かずにはいられないのだが、事件が起きてほしいのとは全く別の話である。

「ターゲットにするなら、もう少し若い方がいい。十六から十八歳くらいの女の子。成熟する前の綺麗な時で時間を止めるの」

クロエが続ければ捺樹はすっかり大人しくなつて聞き入っている。もしかしたら、彼も本気ではなかったのかもしれない。

「殺し方はできるだけ綺麗な方法で、死体にはウェディングドレスを着せて、ヘアメイクも丹念に……敢えて言うならエンバミングがいいわ。手にはブーケ、花を敷き詰めた棺に入つてるといい。でも、白を着せるのは純潔の乙女だけでいい。純潔でなければ黒……そこまでやる犯人ならいつそ子宮を取り出したりしてもいいと思う。穢れたものは要らない」

いつもは口数の少ないクロエがこういう時ばかりは饒舌になる。

こうして他人に語る時が一番楽しいのかもしれない。

「君は殺人に強烈な猟奇性やアートを求めるね」

嬉しそうな捺樹は自慢の恋人を見るかのような暖かい眼差しをしている。

しかし、この二人が本当に恋人同士になれば美男美女で人目を引くだろうが、内面的には最悪のカップルになるだろう。

「さて、そろそろ終わりだ」

大翔が手を叩く。それで颯太はやっと解放された気分になる。

部活動である以上、下校時間は守らなければならない。会長の言うことは聞かなくとも捺樹もそこまでルールに背かない。そればかりか素早い動作で、ハンガー掛けへと向かう。

颯太は彼らの食器を片付けなければならぬというのに、彼はいつもそうだ。クロエが手にするより早く、彼女のコートを手にして恭しく着せてやるのだ。

「俺、やつぱり、引つ越そうかな……」

自分の白いトレンチコートに袖を通し、捺樹は些か大袈裟に溜息を吐いて見せた。

「クロエと逆方向なんて耐えられない。いつそ一緒に住もうか？」

「お断り」

クロエは即答だった。ボタンを留めながらぷいっと顔を背ける。

「龍崎、今は送る役目をお前に譲っているが、狼の役目は俺だけのものだよ。忘れないで」

捺樹は送り狼になることは許さないと大翔を牽制する。

犯研唯一の女子クロエを送る役目は家が近所の大翔の役目である。捺樹はこれが嫌なのだが、全く逆方向の家までクロエを送り届けるほど暇ではないようだ。

「迷惑だ」

大翔にそんな感情は微塵もない。彼は過去の事件にしか興味がないように、現在を生きる人間にも同じように興味がない。だから、クロエなど恋愛対象として見る以前の問題なのだ。

「送ってほしいなんて言っていない。一人で帰れる」

クロエとしても居心地が悪いことだった。

大翔とは元々同じ中学の出身だが、クラスが一緒になったことなく、話したことすらなかったと言う。大翔はその事実すら気付いていなかったという無関心ぶりだ。

「ダメダメ、もし、俺が殺人鬼だったら、真っ先に君を狙うよ」

そうでなくとも彼は既に彼女を狙っている。

「最近、この辺りは物騒だから……てめえがいなくなると色々面倒になる。俺はそういうのはごめんだ」

大翔は損得を考えて自分に面倒が降りかかる前に阻止しようとする節がある。

クロエが変な事件に巻き込まれでもしたら、大翔は趣味に没頭することができなくなる。そうなるくらいならば帰りに多少の寄り道をするこの方がましなのだ。それが言い訳でないことは颯太にもわかっていた。彼は冷血なのだ。

「じゃあ、お先に」

「じゃあな」

「お疲れ様」

「お疲れ様でした！」

捺樹、大翔、クロエ、と順に声をかけられて、颯太は笑顔で見送った。

マグカップなどを洗って、最後に戸締まりするのが颯太の役目である。これに関しては捺樹の後輩いじめではなく、颯太の志願による。

創部二年目の犯研には一年生が雑用をしなくてはいけないというルールもまだ存在しない。

クロエは女の自分がやると言ったが、手が荒れるからと捺樹がさせず、元々は大翔がやっていたのだが、電車の時刻がある彼らと違って颯太は自転車通学であり、それ以外に全くやることがないから引き受けたのだ。せめて少しぐらいは実感がほしかった。

「俺もトレンチコート買おうかな……」

洗い終わったカップを水切りカゴに乘せて、颯太は掛かっている紺色の子供っぽいダッフルコートを見詰めた。

捺樹はシンプルな白、クロエは上品なグレー、大翔はファーのついた黒、と三人ともトレンチコートを愛用しているのだ。それがひどく似合っているのだが、自分は……と想像するとどうにもしつくりこない。下手くそな変装のようになるのではないかと思ってしまう。

はぁ、と小さく溜息を吐き、颯太は戸締まりを確認する。

電気を消し、闇の巣くう部屋に鍵をかけてこそ、一日が平穩に終わる気がしていた。

花のような臭いが鼻腔を突く。トイレの芳香剤のようというよりは、むしろそのものと颯太は常々思っている。

捺樹が淹れるフレーバーティーの香りである。彼は絶対に飲ませてくれないが、臭いだけで、うっとなってしまう颯太としてはその方がありがたいというものだ。

「もつとイベント的な殺人があってもいいと思うの」

得体の知れない紅茶を平然と飲み、そんなことを言い出すクロエは今日も猟奇的だ。

「んなもんあつてたまるか」

顔を顰めた大翔もいつも通りアームチェアにゆったりと腰掛け、コーヒーを飲んでいる。

無関心を主張する割に話を聞いていることがあり、特にクロエの言葉は無意識に拾っている節があると颯太は密かに分析する。そうかと思えば全く聞いていない時もあり、目を開けて寝ているのだという説すらあるほどだ。

残念なことに、ここには彼をよく知っているなどと言える人物が存在しない。外にしてもそうだ。あいつのことならよくわかるよ、と豪語するクラスメートは存在しないだろう。

いたとしても、その気になっただけで、本質は知らない。《ドラグーン》のメンバーにしてもそうだろう。彼らが知るのはリュウであって龍崎大翔の全てではない。

クロエにしても捺樹にしてもそうだろう。

そう考えると三人の関係は奇妙だ。なぜ、犯研が続いてきたかわからないほどに。

大翔はクロエを敬遠し、捺樹は毎日彼女に迫っている。一方クロエは大翔を怖がっているようでもある。彼と話す時は様子を窺って、

言葉を選んでるように見える。捺樹に対しての方が自然体なのだろう。

だが、大翔もクロエを嫌っているというわけでもない。空想としては評価しているが、願望としては否定しているだけのつもりなのだ。そして、それが全く伝えられていないだけだ。

「そ、それでっ、イベント的ってどんなですか？」

ぞっとしながらも気になったのも事実で、颯太は促してしまう。

颯太も最近は自分を見失いつつある気がしていた。ここに入るまでは刑事ドラマが好きで、けれど、それは殺人事件が好きということではなく、ドラマの刑事の個性的なキャラクターというものを気に入ってのことだった。サスペンス好きの母親の影響というのもある。

それなのに、最近はクロエが書く小説にハマってしまったている。

彼女が過去に書いたものは未完、完結問わずに全て読ませてもらった。彼女の小説には人情味溢れる刑事も個性的な探偵なども登場しない。狂った殺人鬼の犯罪を書いているだけなのだが、そこに魅せられてしまう。

文章は流麗だが、脳内にイメージさせられる情景はあまりに惨く淀んでいる。汚泥に飲み込まれている気になるほどだが、読んでいる瞬間はそれが快感に変換されているようだ。

彼女達と事件について語るのも楽しみになってしまった。尤も、そんなのはいけないことだという理性がまだ残っていて、それ故に颯太は自分がわからなくなりつつあるのだが。

「たとえば、ヴァレンタインデーに殺人を犯す。死体をチョコレートでコーティングしたり、トッピングしてみたりする」

クロエの唇は今日も滑らかに動く。そこで颯太はイベント的、という意味を理解する。

「さすが、面白い考えだね」

今日も捺樹は上機嫌だ。その目はどこからどう見ても恋人へ向け

たものだ。愛しさに満ちた甘い表情だ。ここでしか見られない、クロエだけに向けられるものだ。

しかしながら、クロエは今日もささやかな抵抗を見せている。それは照れ隠しと言うには物騒で、拒絶と言うにはまだ弱い。だから、捺樹を止められないのだが、クロエは話を続ける。彼女はこれを慣れたと言い、思い出す度に颯太はぞつとする。慣れとは恐ろしいものだ。

「でも、死体の遺棄場所は冷蔵庫とか寒い場所じゃないといけない」「溶けると美が損なわれてコーティング意味がなくなってしまうね」「確かに、と颯太も小さく頷く。チョコレートでドロドロの死体とというのは考えたくもない。何も美的なところがない。

「カードを、そう『私のヴァレンタインになつて』っていうのを付けたらすれば変質的で面白いんだけど……」

「荷物として送りつけたりすると面倒になるね。色々足がつきそうだ」

「そもそも、大量のチョコレートが必要になると思うし、綺麗にコーティングするには家庭とかじゃ無理だから……」

だから誰もやらないんだ、と颯太は納得すると同時に安心していった。そんな事件が起きたらチョコレートが食べられなくなるかもしれない。

そして、ここで所詮空想だとチョコレートに手を出せないのが、颯太がまだ踏み止まってしまっている証拠なのかもしれない。

話を聞いただけでも暫く食べたくなくなるというのに、一番良識的な大翔でさえ平然と板チョコを嚙っている。彼の場合、聞いていない可能性もあるし、いつものことなのだが、颯太とは違うのだ。

彼らは常人の領域を踏み外している。殺人鬼の領域ではないが、一歩間違えばそちらに行ってしまうかもしれない。普通には戻れない灰色の世界に彼らがいる。それを颯太は白の世界から眺めているのだ。一緒にいながら曖昧な境界線に阻まれている。

「他のイベントも考えているんだけど、なかなかいいのが浮かばな

くて……」

「クリスマスとかですか？」

颯太は聞いてみるが、彼女はもつと斬新なものを考えようとしているに違いない。

「韓国では毎月十四日が恋人達の記念日なの。毎月十四日に何か起こるって面白くない？」

毎月十四日の猟奇殺人デー、そんなのは嫌だと颯太は思う。

しかし、恋人達の記念日と聞いたなら捺樹が黙っていないのでは、と彼を盗み見る。それどころか、毎日を記念日にしたがるだろう。けれど、その彼は時計を見ていた。

「ごめん、俺、これから警察署に行かなくちゃ」

急に捺樹は立ち上がる。クロエの話は終わっていないのに、今の彼には警察の方が大事らしかった。

「今日も君に会えて良かったよ、クロエ。素敵な話をありがとう」
別れのキスでもしようとしたのか、捺樹はクロエに顔を近付けたが、鞆が押し付けられた。彼はそのまま肩を竦めると鞆を掴み、ハンガー掛けへと向かった。

彼がいなくなると空気は平和なものだ。気まずさも彼がいる時よりはましで、大体クロエと話しているか本を読んでいればどうにでもなる。

颯太自身は大翔と話すことに抵抗はない。だが、クロエと大翔が話すと急に空気が悪くなるのだ。お互いに接し方をわかっていないだけのようなのだが、颯太にはどうにもできない。

そして、この時はそれでも平穏だと言える日々が壊れるなどとは微塵も思っていないかった。危ういバランスで延々と続くのだと何の疑いもなかった。

その日、颯太が部室に入ると何やらヒヤッとしたものを感じた気がした。本物の冷氣ではなく、限りなくそれに近い空気の悪さだ。あるいは、殺気というものなのかもしれない。

アームチェアにはいつも通り大翔がいて、ソファーには捺樹だけが座っている。

大翔がいるということは大抵同じクラスのクロエもいるということのだが、その姿は見当たらない。彼女がいなくてこれほどまでに空気が悪いものなのだろうか。

大翔とクロエだけでも気まずさがあるが、その比ではない。彼女が休みならば捺樹はここには来なかったはずだ。《スリーヤミーゴス》が一人欠ければ、犯研は活動しないこともある。

初めての状況ではないが、今日は随分と捺樹の機嫌が悪いようだ。「せ、先生はまだですか……？」

日直か何かだろうかと颯太は首を傾げる。颯太も今正にその仕事を終えてきたところであった。

「この前休んだせいで小テスト受けなきゃなんだって」
そう言えば、そんな日もあったかと颯太は思い出す。

「だから、俺は終わるまで待ってるの」

捺樹はクロエが学校にいる以上、放課後に会わなければ気が済まないようだ。用があつて遅い時は律儀にここで待っている。

「今日はお仕事ですか？」

ビクつきながら颯太は聞いてみる。このまま黙って椅子に座るのも失礼な気がしてしまうのだ。常に注目される彼は無視されることが嫌いなようである。

「警察、彼らには俺の頭脳が必要なんだよ」

またか、と颯太は思う。近頃、彼はモデルよりも学業よりも探偵業が忙しいらしい。妙に警察通いが増えている。クロエと会う時間

を減らしてまで、というのは気にかかる。趣味であって、それほど熱心ではなかったはずだ。それとも、この前の事件でクロエとお揃いのネックレスを買えなかったから自棄になっているのだろうか。

そこで颯太は何を話していいかわからなくなってしまう。

大翔としては静かならばそれで構わないのだろうが、颯太としては気まずすぎる。しかし、切り出す話題も浮かばない。下手な話をすれば身の危険を感じるようになってしまふ。何もしないのは息が詰まるが、何かをしても息ができなくなる可能性がある。

「龍崎」

静寂を、捺樹はその声で破く。声だけではない。射抜くような鋭い眼光に颯太は圧倒されそうになる。

ソファ―に座っている人間が大翔に話しかける時、大抵はその間に颯太がいる。

颯太としては椅子の位置を変えたいのだが、許されない。部室内の共有エリアと大翔のエリアを隔てるものが必要なだとクロエは言った。つまり、颯太は口のついた壁である。

だから、捺樹の視線は大翔に向けられているのに、颯太をも貫くのだ。まるで颯太が来るのを、そこに座るのを待っていたかのよう

に。

「俺はクロエのこと、本気だから」

「は？」

わけがわからないと言った表情で大翔が颯太の向こうの捺樹を見る。

不穏な空気と居たたまれなさに颯太は自分がここにいるべきではないと感じた。彼らは既にいないものとして扱っているのかもしれない。

「あ、お、俺、席外しますね！」

ガタツと音を立てて腰を上げれば捺樹の視線に刺される。彼の目は妙に強い。金縛りにあったような、それどころか石にされてし

まうのではないかと思うほどだ。

「待って、おちびちゃんもよく聞いて覚えておきなよ。後で痛い目に遭いたくなかったらね」

どこかをグサリと突き刺されたような、あるはずのない痛みを感じて颯太は再び席に座るが、どちらを見ればいいのかはわからなかった。

「クロエは絶対に渡さない。誰にもね」

なぜ、自分にも敵意が向けられるのか、颯太にはまるでわからない。

彼がクロエに向ける異常とも思えるほどの愛情が本物であることを否定するつもりはない。彼にとっては自分を愛するようなものだろう。あるいは、家族愛のようなものかもしれない。

邪魔するつもりも毛頭ない。颯太が彼女に抱く感情は尊敬や羨望であり、それ以上ではないからだ。

彼女を美人だとは思うが、恋人になってほしいなどというのは全く違う感情だ。敢えて言うならば、絶対に恋人にはしたくないタイプだ。

彼女を神聖視しているのかと言われればまた違う気がする。彼女が捺樹や他の男と付き合うとしても構わない。それは彼女が誰とも付き合わないとかわかってるからだろうか。

そもそも、颯太は捺樹にストレス発散の相手としていじめられても、恋のライバルとして牽制されることはあり得ないと思っていた。欠陥的な性格の悪さ、異常を覗けば総合的にどこまでも勝っている捺樹が自分を敵として認識することがあるのか甚だ疑問だった。

大翔に対するライバル心はわかるのだ。タイプが違う彼はやはり人格に欠損しているものがあれど、総合評価で捺樹に劣るとも言い難い。むしろ互角だろう。

「興味ねえっての」

「嘔吐き。針千本飲んでよ」

捺樹の責めるような視線に大翔は大仰に肩を竦めた。彼は嘔を吐

いているつもりなど少しもないのだろう。大翔はひねくれた捺樹に比べれば素直な人間だ。

「どうにでもなっちまえよ。俺には関係ねえ。ただし、面倒なことには巻き込んでくれるな。俺の聖域で不快なものも見せるな」

大翔は今を生きる人間には興味を抱けない。安楽椅子探偵として完璧に過去の事件を解き明かす彼の欠陥だ。あるいは、才能の代償なのか。

それが嘘ではないと捺樹も知っているはずなのに、と颯太は疑問を抱く。

大翔自身が気付いていないだけだと言うのだろうか。現在の闇を見詰める捺樹の眼力ならあり得る話だ。しかし、振り返ってみても颯太にはわからなかった。

「その言葉忘れないでよ。まあ、忘れさせてあげないけどね」

「俺はてめえにもあいつにも興味はねえ。特にてめえはめんどくせえ。大体、何でてめえがあいつにそこまで入れ込むのかもわからねえ。絶対に解き明かしたくねえ謎だ」

「お前の側の言葉で言うなら、音楽性の違いって奴じゃないかな？」

「はっ、てめえなんか、そんな円満な理由で抜けさせねえよ。解雇だ、解雇。むしろ、今すぐ辞めてくれ、俺は受理したつもりはねえ」

捺樹は冷やかに来てクロエに一目惚れし、大翔に断りもなく直接校長に承認させて犯研に入り込んだと言う。

そして、自分の手の内を見せた二人目の探偵に校長は大喜びだったと言う。いっそ、探偵部に名前を変えないかという提案までしてきたほどだと聞いている。つまり、校長の探偵好きによってこの犯研は成り立っているとも言えるだろう。

「独裁は崩壊を招くよ。君のバンドもいつまでもつか……解散ライヴくらいならお情けで行ってあげてもいいよ」

ふふふふつ、と捺樹が怖いほど綺麗に笑う。同性ながら妙な色気を感じてぞつとしてしまう。

《ドラグーン》の大ファンとしては聞き捨てならないが、黙って

おくのが賢明だと判断した。

「うちのバンドには、てめえみてえなぶつ壊れた奴はいねえからな。心配無用だ」

「心配なんかするわけないでしょ？ 俺にとって、お前は目障りなだけなんだから」

「安心しろ、てめえはアウトオブ眼中だ」

捺樹の敵視は一方的なもので、大翔はただ煩わしいと思っているだけだが、それで捺樹が落ち着くならば誰も苦労しない。とにかく彼はクロエが絡むと面倒臭い男だった。

「じゃあ、その内、俺がクロエを連れて辞めても？」

「もう構わねえよ」

大翔は自分が安楽椅子探偵であることを隠し、謎解きは犯研の活動の一環となっている。表向き大翔は単なるミステリー好きという認識だ。

安楽椅子探偵としても、自ら連絡をとることはない。颯太も目にかかったことはないが、大翔には目であり耳であり鼻であり手足である人物がいるらしい。

「ああ、今度の生贄はおちびちゃんね」

大翔は他人からの評価さえ興味はない。謎さえ解ければ手柄が自分のものである必要もない。クロエと捺樹が抜ければ今度は颯太一人に擦り付けばいいだけの話だ。

ガラリと扉が開き、クロエが入ってくる。部屋に入るのにノックすることもないのだが、微妙なタイミングに颯太はビクリとした。

「何の話？」

緊迫した空気を感じ取ったのかクロエが首を傾げれば重苦しさは一瞬にして弾け飛んだ。

「クロエ！」

捺樹はパツと表情を明るくして飛び付かんばかりだったが、すぐに紅茶の用意にかかる。

「それじゃあ、今日も一緒にいてあげられなくてごめんね」

砂時計をセットし、クロエの前にカップを置いて捺樹は鞆を掴む。よほど差し迫っているのか、もう帰るようだ。

「最近、若い女の子が失踪してるって話だから気を付けて。みんな、君ほど可愛くなかったけど」

思い出したように捺樹がくるりと振り返る。それは演出なのかもしれない。

「これ持つて。これからは毎日、片時も離さないで。何か嫌な予感がするんだ」

コートのポケットから取り出した指輪をクロエの指輪にはめる。

即座に外そうとするクロエの手を捺樹は包み込んで許さなかった。

「これが嫌なものを引き寄せる気がするんだけど……」

クロエは訝しげにしている。ネックレスの次は指輪かと迷惑がっているのだろう。

「俺が必ず君を守るから」

強く、深い愛情を感じられる言葉だった。捺樹はそっとクロエの頭を引き寄せて、彼女の額に自分の唇を押し当てる。それは、とてもドラマティックに見えた。喉元に万年筆が突き付けられ、両手を挙げて離れるまでは。

だが、颯太は現実になるなどとは思わなかった。クロエも大翔もそうだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6886y/>

スリーヤミーゴス

2011年11月30日16時56分発行